

平成 2 8 年 8 月 1 9 日

美里町議会

議長 吉 田 眞 悦 殿

総務、産業、建設常任委員会

委員長 我 妻 薫

総務、産業、建設常任委員会委員派遣報告書

本常任委員会は、所管事務調査を終了したので、委員会規則第 2 2 条の規定により下記のとおり報告する。

記

- 1、 調査年月日 平成 2 8 年 7 月 2 5 日（月）～ 2 7 日（水）
- 2、 調査視察地 北海道有珠郡壮瞥町、北海道二世郡八雲町
- 3、 参加委員 我妻 薫、 山岸三男、 千葉一男、 藤田洋一
櫻井功紀、 鈴木宏通、 前原吉宏
- 4、 随行職員 佐藤俊幸
- 5、 調査事項 農商工連携の取り組みについて

所管事務調査研修報告

「目 的」

町の活性化を図るためには、地域にある資源を活用した特産物・ブランド品の開発、及び町民の主体的参加が必要と考えられる。農商工連携を強めて町の活性化をめざす壮瞥町と八雲町の取り組みを参考にするため所管事務調査を行った。

「視察・研修の概要」

1、壮瞥町

- 1) 壮瞥町は、面積 205.1 km²、人口 2,666 人、洞爺湖畔に面し、昭和新山をはじめとした有珠山の山麓に位置する観光資源に恵まれ、温暖な気候と火山による肥沃な土壌を活かした稲作、畑作、施設栽培、果樹園、畜産など多様な農業が行われている。
- 2) 農家数の減少や農業経営者の高齢化の進行など担い手不足が深刻な中、就農者への支援策が行われ、起業化支援や特産品開発助成などとともに農商工連携も取り組んでいる。
- 3) 農商工連携の目的として「農業と観光の連携による相互の利益の追求」をかげて、現在 34 億円の観光消費額を 40 億円に伸ばすことを当面の目標に取り組んでいる。

4) 取り組んでいる 4 つのモデルと推進体制

町内の有機栽培カボチャ「ダークホース」のペースト化による「通年提供」「販売方法の多様化」が実現し、飲食事業者向けのレシピ開発。

他の農産品への拡大を検討。

町内農産物を使ったファーストフードの開発と道の駅へのテークアウトコーナー設置の検討。

起業化支援制度の拡充として、トレンドメーカー女子の通う名所をめざした「こ洒落たショッピングエリア」の形成を検討。

ご当地ドリンクの開発

農商工連携事業の担い手はプレーヤー（やる気のある生産者や事業者）で農商工連携推進委員会はいくまでも後方支援に徹する。

5) 壮瞥産リンゴ 100% のシードル製造

平成 26 年 6 月、町内の若手商工業者が中心に設立した「そうべつの未来を考える研究会」が勉強会や視察研修を重ねて製造に至る。

町内に加工施設がないため、搾汁加工は弘前市、醸造は京都府の事業者委託している。

姉妹品としてノンアルコールの「Sparkling apple juice」も製造。

特産品開発についての補助金 2 種類、道の駅におけるテスト販売など壮瞥町特産品開発に向けた事業展開を 3 パターンで進めている。

6) 農産物直売所「サムズ」

道の駅そうべつ情報館 i (アイ) 内に設置、施設の指定管理者「有限会社そうべつフレッシュプラザ」が清掃・除雪・芝の管理等の施設と駐車場の管理と合わせて営業を行っている。

「町内農家の利益確保」と情報発信をはかり、町には年間 100 万円の施設使用料を支出し、社員 4 名他 8 名で運営している。

年間約 2 億円の売り上げがあり、登録会員数約 70 戸のうち常時出品するのは 20 ~ 30 の農家で、少量生産多品種の農作物による委託販売 (手数料 15%) で運営している。40 代以下は少なく、高齢化が課題。

生産のなくなる冬場は、リンゴだけでは厳しく、町外の洞爺湖農協から仕入れて品揃えすることもある。季節に偏らない PB (プライベートブランド) 商品の開発を検討。

道路沿いの農家による「そうべつくだもの村」との競合も課題。

近隣自治体も含めて、野菜目当ての客が多く、最近増えている外国人観光客の立ち寄りほとんどない。

2、八雲町

1) 平成 17 年 10 月 1 日に旧八雲町と旧熊石町が合併した八雲町は、日本海と太平洋の「二海」を持つ、面積 956 km²、人口 17,345 人の農業、漁業ともに恵まれた立地の町。

2) 服部醸造株式会社

尾張徳川に仕えた服部家が昭和 2 年に創業した、90 年の歴史を持つ味噌・醤油の老舗、町内農産物の米と大豆、海洋深層水と地元産にこだわったブランド味噌を製造。

旧八雲町の豆と旧熊石町の米、海洋深層水が町村合併により町内産 (地元産) となったことにより補助対象の農商工連携事業と認定され、ブランド「八雲味噌」につながった。

地元銀行のマッチングをきっかけとし、服部由美子専務の熱心な探究心と行動力が北海道、八雲町等との連携につながり、「八丁味噌」の他にも塩麴、プリンなどの菓子類等々が開発され、町のブランド品として「丘の道」と道内の支店、通信販売等で町内外に発信されている。

3) 情報交流物産館「丘の駅」

道立公園 (噴火湾パノラマパーク) 内の道央自動車道八雲 PA に、平成 22 年 7 月にアンテナショップ運営の実証実験として「丘の駅八雲パノラマ物産

館」が開設、平成 26 年 4 月に現施設がグランドオープンした。

八雲観光物産協会が指定管理者として、町・町内産業経済関係団体等の協力を得ながら運営している。

「八雲味噌」はじめ一次産品を活かした特産品など、地場産品を展示・販売するほか、八雲町を含めた近隣町村の観光情報を提供している。

地域産品開発などの企画や支援として、「テスト販売」利用の募集を行っているが、これまで 6 件ほどの利用にとどまっている。

[意見]

- 1) 壮瞥町のリンゴシードル、八雲町の「八雲味噌」も実施主体が農業生産者ではなく商工業者である。本町としても農業生産者だけではなく、商工業者に意欲を持ってもらうような働きかけが必要である。
- 2) 「やる気のある生産者や事業者」が担い手であり、行政はあくまで後方支援に徹する、とする壮瞥町の考えは基本と考えるが、町民の意欲を引き出すためにどう働きかけをしていくか両町とも共通の課題を抱えている。本町としてもより幅広く関心を高めていく必要がある。
- 3) 壮瞥町の農産物直売所とそうべつくだもの村で直売している生産農家との協力関係が課題となっている。本町においても既存の各種直売所と「新設予定施設」との関係を丁寧に調整を図っていく必要がある。
- 4) 農産物直売所は季節によって品揃えが難しくなることを踏まえ、季節に偏らない特産品としての PB 商品の開発にも力を入れる必要がある。